

加味して、この頃左大臣であつた人は公卿補任により実頼が天曆元年四月廿六日から康保四年十二月十三日左大臣となると云うのを見る事が出来るのでこの間に交際があつたものと解したい。

頼忠に関して本家集で、

三条のおほひまうち君の賀権中納言のつかうまつれる屏風の絵に花見て帰る所〔二〇七六七〕

の歌は訶花集で「三条太政大臣賀の——」とあり風雅集で「廉義公賀志ける——」によりて詞書に表記された人物が同一人と思われる。諸資料によれば頼忠の諡が廉義公、号が三条太政大臣と云うのが分つた。では頼忠のこの時の賀は何才であつたらうか、官名の表記の低いと考えられる本家集の詞書から考えると、大臣となつたのは天祿二年十一月二日任右大臣公卿補任以後となるだろう。天祿四年に五十を迎える頼忠は公卿補任によればこの年五月に「賀五十算」と云う記事が見えているのでこの五十の賀を詠んだものと考えたい。

師輔の本家集に關係する歌は、

坊城の右のおほひ殿の五十賀中宮し給ふ、村上先帝のめしたる〔二〇八二五〕

の一首である。坊城の右の大臣とは諸資料とも師輔である。この人の五十と云うのは公卿補任で天徳元年である。この

年正月十四日に賀を行つた記事が九条殿記日本記畧等に見えているのでこの時の歌詠である事は充分うなづけよう。

師輔の子で兼通については、

堀川中納言の韻のふたぎの所めしたりけるに〔二〇八七〕

が見える。尊卑分脈によれば兼通は「堀川殿」と号していた。

兼通が中納言であつたのは公卿補任で天祿三年二月廿九日から同年十一月廿七日までで、その間の歌詠と思われる。

以上家集を基礎資料として中務の伝記の考察を歌の制作年時から併せてながめてみたわけである。

註・引用歌は国歌大観及び続国歌大観の番号のみで掲げた。

幻住庵記と嵯峨日記

衛 藤 芙美代

芭蕉は武士の出ではあつたが、その世界を捨て、庶民と共に生活をした。芭蕉自身僧形であつたが、隠者、漂泊者の生活をしていた。それで芭蕉を一般に自然の詩人、あるいは閑寂の詩人とも言つてゐる。然し、それと同時に芭蕉

はいわば人情の詩人ででもあつた。それは芭蕉が常に人間を、生活を、人生を考えている人だという事である。芭蕉に於ては自然の風詠も、歌枕への執着も古人への追慕も芭蕉の生活態度の重要な一面であることは、すでによく認められていたところであるが、そうした面が俳文「幻住庵記」や「嵯峨日記」にも現われていることは言うまでもない。それ故に芭蕉作品中、日記、紀行を除いて最も傑作といわれている「幻住庵記」と芭蕉唯一の日記である「嵯峨日記」を比較することにより芭蕉のかくされた一部分でも指摘出来たらと思うのである。先ず、作品自体の分析を行いつつ、作者の生活態度及び、心境、思想に如何なる相違があるか、比較対照し精査して行きたい。「幻住庵記」と「嵯峨日記」の作品の特色や性格を知るために、これらの作品が草庵生活に於ての執筆であるという意味においては同質的なものでありながら、それにも拘わらず、生活態度、心境に於て異質的なものがあるということに着目して行きたい。

(一)

「幻住庵記」の本文については所伝が多く最近初案、再案、成案の過程中に四種あることが認められている。こゝに取上げるのは、文章、構造共に整一般に決定稿とされている「猿蓑」所収のもので本文引用及び書簡番号は、日本古典文学大系46「芭蕉文集」杉浦正一郎、萩野清、宮本三郎校注による。

「幻住庵記」の成稿年次は「芭蕉俳文集」(阿部喜三男著)所収真跡(「芭蕉函録」所収)により文末に「元禄三仲秋日芭蕉自書」とありまた去来宛芭蕉書簡44などから考証して元禄三年八月とする。元禄二年暮春、当時46才の芭蕉は門人曾良を随えて、前後六カ月にわたる東北への旅に出て同年九月奥の細道の旅を終えたが、なお中国、四国、九州への行脚をするつもりであつたらしい。しかし奥の細道の長途の旅の疲れと健康の衰えは、その行脚をばぐんだ。当時の彼の書簡を見ても明らかのように、しきりに「残生」の言葉を使っている。健康の衰えを感じた所以であろう。こうしてやむなく元禄三年四月47才で門人曲翠の提供による幻住庵に入庵したのであつた。そして半年も住まずして、同年八月彼の肉体の不調等で幻住庵をすて、粟津義仲寺へ移つたのである。

「嵯峨日記」は言うまでもなく、元禄四年四月十八日から、同年五月四日まで、門人去来の別墅、嵯峨の落柿舎に滞在していた其間の日記である。芭蕉一代の中で日記という日記はこの「嵯峨日記」のみである。しかし芭蕉が当時日記をつけていた事を記す文は見えず、「嵯峨日記」も仔細にこれを見れば、芭蕉がこれを一個の文芸作品として完成しようとしたものであることがはつきり判り、決して単なる其日、其日の備忘的日録の偶然残つたものではない。即ち、芭蕉には普通の意味にいう日記は一つも伝わっていない。

ないのであり、純粹な文芸作品としての意図をもつた「嵯峨日記」という作品があるのみである。しかし「嵯峨日記」が明らかに文芸作品としての意図をもつて書かれたとはいうものゝ、作者が意識して書いた筆の中にも眞の作者の性格、思想、人間性というものが伺えると思うし、又、案外意識せずに筆をすべらした所もあるのではないかと思ひ、そういう所に重点をおき論をすゝめたい。

(二)

芭蕉の作品を読み感得出来ることは、彼の作品に漢土の影響を、また我国先行の旅の詩人、西行や、長明、宗祇、心敬等の如き代表的な作家の作品及び、思想の影響のあることである。この「幻住庵記」も去来宛書簡44（元禄三年七・八月頃筆）に「長明方丈の記を読（む）……」とあり芭蕉が「幻住庵記」の執筆にあたり長明の「方丈記」を胸裏に持つていたことは想像にかたくない。そこで「方丈記」と「幻住庵記」を対比しつゝ、どの程度の影響、暗示を受けたか、重要と思われる構成の面を主に比較してみたい。先ず、入庵以前の両者の人生体験も長明が生きた時代が、日本歴史の上で古代から中世への移りという大きな歴史の転換期に生き、そうした社会的、自然的に不安定な時代を身を以て体験し、しかもその生涯のよりどころが日野外山の方丈庵という隠遁の生活であり、波瀾多き六十年間の自己の生涯の回顧であるのに比し、芭蕉のそれは、青年時代か

ら遊蕩気味のあつたことも推定され、主君の死等にも直面し、放浪難苦の時代もあつたが、芭蕉の生きた寛文から元禄の時代は一言で言えば町人の時代であり、戦もなく世は全く平安であつた。それで社会的、自然的条件に於ては長明ほどでもなかつた。両作品に於て言えることは、短編ではあるが構造が極めて整然としており、しかも全体が明確に意図された構成でなされて、その主題も「方丈記」に於ては「無常の世にいかん生くべきかの人生記録」であり、「幻住庵記」は「さびを愛し、身の無能無才をなげきながらも、風雅一すじに生きた」自己の反省である。構成に於ては、両作品共、五段に分けることが出来るが、構成面には模倣しておらず芭蕉は彼独特な要を得た手法で論を進めている。そこで「方丈記」の前半の天変地異に関する項は略し、重要と思われる庵生活と芭蕉の「幻住庵記」を比較し、その内容を精査してみたい。入庵当初の年令及び、草庵の状態を見ると、「方丈記」に於ては、「六十の露消えがたに及び」てであり、その心境も「いはゞ旅人の一夜の宿をつくり、老（い）たる蚕の繭を営むが如し」であり、庵のありさまも「よのつねにも似ず、広きはわずかに方丈、高きは七尺がうちなり」とあり、「幻住庵記」に於ては「五十年や、ちかき身」で入庵し、草庵の有様も「根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり」という状

態で、その心境も「やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」で両者共晩年にいたりし頃の老後の住居、それも世間普通の家とは似ても似つかない簡易な草庵住いである。次に草庵を囲む美景は「幻住庵記」は「つゞじ咲残り山藤松に懸て……小田に早苗とる歌、螢飛かふ夕闇の空に水鶏の扣音」など「美景物としてたらずと云事なし」である。それは屢次にわたる旅の実践を通して自然を探り、その美に酔い狂じていこうとした貞享期の風狂の態度を止揚して、今、こゝに求道者にも似た一種宗教態度を以て自然の永遠の生命に帰入合一するところに一つの到達点を見出さんとしつゝあつたのである。^(注2)一方「方丈記」は庵の周囲の四季折々の情趣を述べ「春は藤波を見る……夏は、郭公を聞く……秋はひぐらしの声、耳に満てり……冬は雪をあらはれぶ……」として、「幻住庵記」とは全く趣を異にし、この四季折々の情趣を描いたところは、仏教徒の目に映る自然のみごとな描写といえる。それは自然愛好の心と修道者の心が閑かな自然の美的情趣への陶醉によつて立派な融合をなしとげているのである。^(注2)

次に庵での生活状態は、幻住庵に於ては多少「軒端茨あらため、垣ね結添などした」けれども家の内部は「一炬の備へ」という状態で調度品とてもないわびた生活である。この生活で唯一の奢りといえは高良山の僧正から書いてもらった「幻住庵」の額ぐらいなものので何の器物もなく「木

曾の檜笠、越の菅蓑計枕の上の柱」にかけてあるという貧僧の山荘生活である。「方丈記」は「阿彌陀の絵像、普賢、法花経」を置き「和歌、官絃、往生要集」や、「琴、琵琶」を立て、遁世者としての閑居生活の中に自ら否定し去つたはずの俗世的な、あるいは貴族的な生活様式を混入させていることは、多くの論者も指摘しているようであるが、これを宗教的な立場から見るとは不徹底なことばまぬがれ得ない。聖なるべき方丈庵に貴族的な教養を保持し続けていた事は長明が芸術的心の持主であり、仏道修業者としての面と芸術家としての面とが共存していることに相應するのである。やがてその閑居生活の状態も峰に登り、故里の空をのぞみすでに捨てたはずの都を懐しみ「蟬歌の翁があとをとぶらひ」「猿丸太夫が慕」を訪ねたりで修道生活からはほとんどはずれてしまつていようである。その結果「山中の景気尽くる事なし」である。今までの苦しかつた都の生活はすでにこゝにはなく「身を知り、世を知れ、ば願はず走らず、たゞしづかなるを望(み)とし憂へ無きを楽しみとす」であり、方丈生活の一つの結論ともいえる。この閑居の気味も「住まらずして誰かさくらむ」と自信をもつて言つている。都の生活とこの草庵生活を比較し、この草庵生活がより純粋に貴族的な風雅世界を享受出来るそういつた楽しみ的心境を述べているのだと思う。一方「幻住庵記」は人間嫌いをして入庵したものゝ、さすが

にその裏には常に人恋しき、里恋しきがあつたようである。たとえば「三上山は土峯の佛にかよひて、武蔵野の古き栖」も思い出され、「王翁、除佞」の真似はしても、実生活たるや「とくく」の零を侘て一炉の備へ」という何の調度品とでもない荒涼たる生活である。たまたま訪れてくる「宮守の翁、里のおのこ」と「いのししの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談」にうさを感めることはあつても、夜はひとり月に向つて冥想に心をこらすのである。幻住庵での生活は仏教的な支柱を捨てた芭蕉が風雅に生きようとする生活を見出し、安住の地を見出しているようである。以上のように両者間における生活態度に大きな隔たりを認めることが出来る。最後に人生、処世観についてみるに「方丈記」は今まで長明が、自由な気持で仏徒の生活を行い、自由な気持で風雅に親しむ事が出来、いわば孤独な方丈庵生活を「閑居の気味住まずして誰か悟らむ」と楽しく安住していたのであるが、やがてそのような風雅に執着すること自体が往生の障害となることを自覚するに到るのである。「今、草庵を愛するもとがとす、閑寂に著するもさはりなるべし」という閑居生活を反省し、正面から対決するのである。この閑居生活、換言すれば独居の楽しみは、長明にとつて再び苦悩に逆転するのであつた。ついに「しづかなる晝、このことわりを思ひつゞけて……すがたは聖人にて、心は濁りに染めり」と以下

強烈な内的葛藤が展開される。姿は出家でありながら内心は濁世への執心をたぢきぬという自己矛盾(自家)がえぐり出され、それは避けてとおる事の出来ない内心への深刻な問責となり彼に解決を迫るのである。この烈しい自己追究の結果「不請(の)阿彌陀仏、両三編申(し)てやみぬ」と絶句するところに終る。一方「幻住庵記」は「かりそめに入し山のやがて出じとさへおもひそみぬ」と固い決心をしながらも「かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとはあらず」といわば「病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」とそれは俗世間を愛しとするのであつて、こういう閑居生活をいつまでも続けようとするのではない。こゝで芭蕉が「ひたぶるに閑寂を好む」のではないといふものゝ、この全構成からしてさびを愛するといふ一老年的性格とした方が良いかも知れぬがその気持が現われているのである。又、芭蕉が過去五十年間を反省し、我が身の至らない失敗を反省し、ある時は「任官懸命の地」を得たいと思つたのである。それは、彼が武士の出であるといふ事からすれば当然な事であるが、彼が文芸によつて身を立てるべく決意し、行動したといふ事実こそ尊いものであり、中世以来こゝに始めて実行されたのである。又、ある時は「仏籬祖室へ入らむとせしも」と述懐しているように、すでに武家及び町人によつてリードされる封建社会と訣別し、孤独と窮乏の中に活路を求めた芭蕉

は、当然おのれの内なる人間性とも対決せざるをえなかつた。世にそむいた上に、おのれの情欲と対決するその困難さがそのように彼を仏門へいざなつたのである。しかし彼は詩人であることを放棄することが出来なかつた。「風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして比一筋につながる」と芭蕉が身の無能無才をなげきながらも、尙、やみがたい風雅に生き、人生の道を見出すに至つたことは、俳諧に生きることにすべてを賭け、人間嫌いをして、乞食同然の行脚を続け、その生活の中に自然を追求してきたこれまでの求道者的実践の結果だと思ふ。次に人生観についてみるに「賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずや」というこのところに芭蕉の言わんとする人生観があるのだと思ふ。いわば人生はどこも幻の栖の如くはかないものである。彼が幻住庵での生活で到達したものは、自然と交感合一し、自然によつて自己の人生を象徴するといつた一種独自の表現法をこゝに完成したのである。このように見てくると、長明が遁世者としての閑居生活に徹しきれぬ有様であつたのに比し芭蕉のそれはさびを愛し寂しさそのものゝ意味を生かしている事が感得出来、風雅一筋に生きて来た芭蕉の徹底した生活態度が感じられる。

「方丈記」と「幻住庵記」は構成の上でわずかに共通点を認めるが、その根本的な問題である生活態度や人生観に至

つては、非常な隔たりがある。従つて両者の關係は比較的に外部面にわずかの影響を受け、その根本的な内面的な事に關しては、余り深く影響は受けていない。従つて「幻住庵記」は彼独自の要を得た構成法であつたということが出来る。

(三)

「嵯峨日記」は「幻住庵記」のように先蹤の文学を心にもつて推敲に苦心を要した作品ではない。この日記は、芭蕉が思うまゝをくつろいだ態度で書き記して推敲を重ねたというだけに興味深いものを含んでいる。それは、芭蕉の人間の、人情的な温かさを感じると同時に芭蕉の眞の姿を見出す事が出来る。この落柿舎は、去來の提供によるものであるが、芭蕉が入庵した当時は、相当地に住み荒していたらしく「落柿舎ノ記」には、「五月雨漏尽して疊障子かびくさく、打臥処もいと不自由」とあるけれども、それでも幻住庵などとは比較にならず、その昔は日記にもある如く「彫せし梁、画ル壁」もあつたらしく、今はそれも風に破れ、雨にぬれて、「奇石怪松」も葎の下にかくれてしまつている。しかし芭蕉は「中々に作みがかれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心と生まれ」といい、この類破した家を去來は「障子つゞくり葎引かなぐり」して暫く住居にしたのである。なお生活に必要な調度品等も幻住庵での「一炬の備」という簡易なものではなく、この落柿舎

では、「机一、硯、文庫、白氏集、本朝一人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記……」を置き「さまざまの菓子……名酒一壺盃を添え」夜の衾、調菜の物共……乏しからず」と芭蕉自身「我貧賤をわすれて清閑ニ樂」といつているのも彼にしてみれば最もなことであろう。又、この日記を読み感得出来ることは、庵生活に於て非常に門人達との交際が烈しく行われたということである。これは幻住庵で時たま村人達との豊談で過す生活とは少し違っているように思う。又、興味がわけば句を作り、天氣の良い日には附近の寺院に詣で、名所旧跡を廻つたりして古を懐しむといった具合に庵の生活は淋しいと言うよりは、むしろ賑やかでさえあつた。しかし時たま「人不來、終日得閑」ということもあり、又「昼伏たれば、夜も寝られぬ」時もあり、そういう時は「幻住庵」で書き捨てた「反古を尋出して清書」するのであつた。いまこの日記で注意すべきは、廿二日と廿八日の条であろう。まず廿二日の条を見ると芭蕉の閑居生活についての考えが伺える。本文を引用してみると

「けふは人もなく、さびしきまゝにむだ書してあそぶ。

其ことば、喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲ものは樂をあるじとす。「さびしきなくばうからまし」と西上人のよみ侍るは、さびしさをあるじなるべし。又、よめる、

山里には又誰をよぶこ鳥独すまむとおもひしものを
独住ほどおもしろきはなし。長嘯隱士の日、「客は半日
の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」と。素堂
比言葉を常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんことどり

とはある寺に独居て云し句なり……」

こゝで重要なことは「独住ほどおもしろきはなし」という言葉である。芭蕉は西行や長嘯子を引き合ひに出して、自らもその先輩達と同じく、独居の閑寂を喜ぶ氣持を述べたものと思われる。しかしよく考えてみると、芭蕉の寂びを樂しむ心と西行や長嘯子のそれは、多少開きがあるように思われる。そこでこゝに引かれた西行の歌を検討してみると、

山里には又誰をよぶこ鳥独すまむとおもひしものを

とふ人も思ひ絶えたる山里のさびしきなくば住みうか

らまし

とある、こゝでいう西行のさびしきは、そのさびしきになりつこうとする心である。身は出家しているけれども心の底には詩人的な人間愛が動いており、悩み多い世をのがれて憂いを忘れようとする閑居生活であり、隱遁である。それに比べると、芭蕉のそれはさほどに世をいとう氣持はなく、「や、病身人に倦て、世をいとひし人に似たり」という程度で芭蕉は世捨人になる氣持は少しもないのであ

る。だから芭蕉はわざ／＼「似たり」という言葉を用いて自己の生活を表現したのである。それは「独住ほどおもしろきはなし」といつているように世の憂や悩みを忘れる為ではなく、積極的に寂びを愛し、風雅に徹しようとする心である。長嘯子のそれは、煩わしい程に賑やかな生活から退いて林泉の静寂を愛した貴族趣味の変形に近いのである。それに比すと、芭蕉にはそうした豊かさはなく、積極的に寂びを愛するといつたいわばさびた世界である。次に廿八日の条は、夢に門人杜国を見て、その薄命に涙を流したのである。こゝには芭蕉の燃えるような子弟愛、換言すれば、彼の胸裏にある人間愛のあらわれだと思われる。周知の文章であるが引用してみると、

「夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して覚ム。心神相交時は夢をなす。……我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜は床を同じう起臥、行脚の勞をともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。ある時はたはぶれ、ある時は悲しび、其志我、心裏に染て、忘るゝ事なければなるべし。覺て又袂をしぼる。」

このように杜国に対しての信望が厚かつただけに、その死が芭蕉をより悲しませたのである。芭蕉の子弟に対する切々たる愛情が遺憾なく表現されていると思う。このような情熱的なまでの子弟愛が胸裏にあるからこそ、多くの門人達からも慕われ、尊敬されたのである。この条は子弟愛

の情熱、いいかえれば芭蕉の胸裏にある人間愛、即ち、芭蕉の人間性のあらわれとみてよいと思う。

結び

「幻住庵記」と「嵯峨日記」は共に芭蕉の草庵閑居の折に執筆されたものであり、草庵住いという点においては同質的なものでありながら、草庵での生活態度及び、心境、思想に於ては趣の違いを見出す。「幻住庵記」に於ては、簡素な生活の中にひたすらに寂びを愛し、過去五十年間の自己を反省し、無能無才を歎きながらも俳諧一筋に生き、そこに安住の境地を見出したのである。要するに、「幻住庵記」は「奥の細道」の長い旅の疲れと病弱の身を養うために、仮の庵に一時的に身を託し、一方には風雅に身をせめながらも、一方には「いづれか幻の栖ならずや」という人生觀に到達することによつて、吾と吾が心を慰めているものである。

それに対して「嵯峨日記」は、その文章は日記形態で簡潔ではあるが、独居をよろこび、寂びに徹しようとする芭蕉の積極的な態度の現れと、芭蕉の人間愛が最もよく現わされているものである。「嵯峨日記」を読んではじめて芭蕉の真実な人間性に触れることが出来るように思われる。そして芭蕉という人間性にいよ／＼魅力を感じるようになる。それは彼が表面的には病弱で涙もろく、何かたよりなさを感じさせるようでありながら、自己及び、自己芸術に

対しては厳しく批判して、一日として精進を休めることのないのに、他の人に対しては、非常に愛情深く、何事も積極的に指導するとともにその人間性を喜び、愛していこうとする真摯な態度に心をひかれるからであると思う。

注1 尾形働著「芭蕉とその門流」岩波講座

注2 畠倉徳次郎著「方丈記詳解」有精堂

注3 「方丈記と徒然草」永積安明著

西鶴文学に於ける

リアリズムの限界

— 日本永代蔵を中心として —

国文専攻四年九号

尾 坂 綾 子

序 論

西鶴が生きた時代、寛永末から元禄初年まで、十七世紀中頃から半世紀は、中央集権の封建制度の完成期であると共にその反対勢力ともいへば町人階級の擡頭期でもあった。慶長十七年の鎖国令、寛永十二年に於ける参観交代制の確立など、対外的対内的な中央集権の為の新制度はさておき、世襲を建前とする身分制度と家族制度を確立し、個人の価値や尊厳や自由はもとより、人間性をも能う限り否

認して、秩序を保とうとする封建的支配隷属の関係を整備して、自由に伸びようとする被支配階級をしめあげた事はまさしく中世の分権時代に見られないこの時代の悲劇的な特色であつた。

人間の力の認められぬ所に、心の自由の虐げられる所に發展も創造もあり得るはずはない。このような暗闇の袋小路をつき抜けて新しい人間、即ち近世町人は生まれ出たのである。はじめて己れ達の為の新しい歴史の舞台に登場して来た彼等町人にとつては、古い中世の因習的な物の見方を払いすて、新しい自由な物の見方を身につける、その為には大切な養分となる生きた知識を我が物とするという仕事に緊急の課題となつて来ていたのであつた。

内裏様のとてはかになし今日の月 西鶴

というような平等の主張と抵抗の意識を蔵した町人俳諧の成立、ひいてはそういう意識や主張を随所に露出している西鶴文学の武士は以上のような近世前期の政治、経済的ないし思想的諸条件を前提としてのみ正しく理解しうるであらう。

文学が新しい町人の為の文学である為にはそれが他の誰のでもない、町人自身の生活のあるがまゝの再現である事が望ましい。そこで前時代から残されて来た古典や、古説話の素直な近世化や殊更な近世化、もじりやパロデーの他に在来の文学の中からは全然求め得ない新しい題材や主題